

「存在文」が表す〈存在〉の意味および‘定-不定’の問題

木村英樹

【要旨】

中国語の「存在文」は、動詞“有”を述語とし、時間詞または場所詞が主語に立ち、存在対象を表す名詞表現が目的語の位置に据わる。従来の記述では、「存在文」の目的語は、「多くの場合不定(indefinite)の名詞表現であり、かつ、一般に数量詞を伴い、裸名詞であってはならない」(劉月華等 1983)とされており、(1)や(2)の下線部のような例が「存在文」の典型とされている。

- (1) 我抬頭一看發現樹上 有 一 只 熊貓, ……

木-上 ある 1 CLF パンダ

[ふと見上げると、木の上にパンダが一頭いて、……]

- (2) 従前 有 座 山, 山上住着一群土匪。有一天, ……

以前 ある CLF 山

[むかし、一つの山がありまして、山には匪賊が住んでいました。ある日、……]

しかし、「多くの場合」や「一般に」という限定表現からも伺えるように、定表現を目的語とする「存在文」や、数量詞を伴わない裸名詞を目的語とする「存在文」の例は現実には珍しくない。

- (3) 家里情况挺好的, 有一老人, 有 我 爱人, 有两个小孩儿。

家-なか

ある 私 妻 (《当代北京口语语料 东城》)

[家のなかはうまく行っていて、年寄りが一人がいて、私の妻がいて、子供が二人いた。]

- (4) 乌鸦看见一个瓶子。瓶子里 有 水。(《小学語文》)

瓶-なか ある 水

[カラスには一本の瓶が見えた。瓶のなかに水がある。]

では、いかなる場合に「存在文」の目的語は不定表現でなくてもよく(つまり定(definite)であってもよく)、また、いかなる場合に数量詞を伴わない裸名詞であってもよいのか?そのことを明らかにした先行研究はいまだ見あたらない。

今回の報告では、目的語の定不定に関する問題および数量詞付加の問題に焦点を当てつつ、中国語の「存在文」の特性を構文論および機能論の観点から考え直してみたい。